

韓国における日本酒販売について

ソウル駐在員事務所

韓国における日本酒の輸入量は年々増加傾向にあります。2012年の輸入量は約3,781kℓ、5年前の2007年の1,293kℓに比べ約2.9倍の量まで増加し、現在では数百銘柄の日本酒が国内に流通しています。日本酒ブームは、かつての円安ウォン高時に多くの韓国人観光客が日本を訪れ、日本の食文化に触れた若者を中心に国内で日本式居酒屋ブームが巻き起こったことがきっかけとも言われています。また近年のWell-Being志向により、低アルコールで健全な飲酒文化の広がりも日本酒人気の火付け役となっています。

【韓国における酒（清酒）輸入量】

（単位：千ドル、kℓ）

区分		2007年	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年
酒 (清酒)	金額	3,947	6,473	9,638	14,220	15,260	16,658
	数量	1,293	1,865	2,641	3,424	3,555	3,781
前年対比	金額		64.0	48.9	47.5	7.3	9.2
増加率%	数量		44.2	41.6	29.7	3.8	6.4

（資料：韓国関税庁）

若者が多く集まる学生街の弘大地区（ホンデ）にはたくさんの外食産業が集まっており、日本式居酒屋も多数存在します。しかし、実際に消費されている日本酒は紙パック型の日本酒（900ml、約2万W～4万W前後、日本円：約1,800円～3,600円）が大半を占めています。これからの寒い季節には若い世代を中心に日本酒の熱気がよく売れるそうです。

一方、富裕層が集う江南地区（カンナム）の高級ホテル、日本食レストラン、寿司屋等では約20万W～50万W（日本円：約1万8千円～4万5千円）の日本酒（720ml）がよく売れるそうです。レストランの種類、客層、単価によって日本酒の売れる銘柄も異なります。

大手スーパー（Eマート、ロッテマート等）、百貨店（ロッテ、新世界、現代）では安価なものから地酒まで様々な日本酒を取り扱っています。近年のウォン高の影響によって以前より日本酒の輸入価格が安くなり、業者間の価格競争が一層激しくなりました。それでも店頭価格は諸税（関税、酒税、教育税、付加価値税）、流通コスト、マージンを含めると日本の約3倍です。業者の中には韓米FTAのメリットを活かし、低コストの米産日本酒を輸入する業者も見受けられます。その他、韓国産の清酒「チョンハ」（写真参照、1,680W、日本円約151円）は手頃な価格で購入でき、年間約4千万本売れている人気商品です。



韓国産清酒「チョンハ」

（写真参照、1,680W、日本円約151円）は手頃な価格で購入でき、年間約4千万本売れている人気商品です。

毎年たくさんの韓国バイヤー、一般客で賑わう展示商談会には、JETRO や各地方自治体の支援を受けた多数の日本の酒造メーカーが参加しています。また、韓国では、酒税法の改定に伴い輸入業者による消費者への直接販売が認められるようになり、日本酒輸入業者数が約 50 社近くまで増えました。しかしながら居酒屋・日本酒ブームとは言え、日本の酒造メーカーが韓国国内で独自に販路を開拓し、流通・販売まで行うことは決して容易ではありません。まずは価格が折り合い、しっかりとした販売先を確保している現地業者を見つけることが韓国における日本酒販売の大きな鍵となります。

当行においては今年 11 月、眞露株式会社（日本法人）と海外バイヤー 4 社を福岡へ招聘し、九州内で酒類業を営むお取引先の海外販路開拓を支援する「九州酒類輸出商談会」を開催しました。商談会では九州側企業が自社製品の特徴や酒造りに込める思いを熱心に P R するなど、大変活発な商談が行われました。今回参加されたお取引先からは、海外バイヤーとの貴重な商談機会が持てたことや、自社製品への好評価が得られたことについて満足の声が寄せられました。



九州酒類輸出商談会の様子

ユネスコの無形文化遺産に「和食」の登録が決定し、それに伴い世界で日本酒への関心も高まっています。また T P P（環太平洋経済連携協定）交渉における日本酒関税の撤廃等が具体化すれば、今後日本酒は益々世界で消費されるでしょう。当地においても日本式居酒屋や日本酒ブームは当面継続すると予測されており、近い将来、安価で日本各地の名酒を身近に味わえる日が来ることもそう遠い話ではないかもしれません。

（為替 1 W = 0.09 円にて換算）



E-MART 龍山店の日本酒コーナー



ソウル市内初の日本酒専門店「酒蔵」